



見吉井曰
野 曇 安

第三部



筑摩書房

安曇野 第三部

© 臼井吉見
一九七二

昭和四十七年四月十五日第一刷発行
昭和五十年二月十日第十刷発行

著者 臼井吉見

発行者 井上達三

印刷 大日本法令印刷
製本 鈴木製本

発行所 筑摩書房

東京神田小川町二ノ八
振替 東京四一一二三
電話 東京二九一七六五一

(分類) 0093 (製品) 80079 (出版社) 4604

安曇野

第三部

そ の 一

秋口だというのに、中村彝は、早くもメリヤスの襦衣ジュイに身をかためて、褌袴代りの浴衣に、黒っぽい袴ハカマを襲着オサキしていた。褶ひだもなくなった袴には、いたるところ、絵具がとび散っている。自分のアトリエで袴をつけているのは、肝腎の着物を絵具で汚さない用意なのか、裾のみだれを防ぐそれなのか、おそらく双方のためだったろうが、いまはただの習癖クセになっていた。頬から顎へかけての無精髯ムセイが目立ち、襦衣の釦ボタンのはずれからは、干物のさかなみたいな平べったい胸がのぞいている。雑草のようなもしやもしやした髪のかぶさっている長めの顔も冴えなくて、画筆を握る手は、細っぽく、骨ばっていた。ときおり、筆を休めて、俊子に見入るときだけ、目のいろに妙になまなましい光がまじった。

白地に濃紫の矢絰ヤタテの銘仙の対に、セルの海老茶の袴という恰好の俊子は、窓ぎわの椅子にかけ、片脰ヒタタテを卓子にもたせて、いたって尋常なポーズだった。髪は無雑作にたばねて、うしろへ垂らしている。

十二号ぐらいの画布には、そうした俊子の姿が写されていたが、完成にあと一息というところだった。画布のなかの俊子は、女子学院の生徒というよりは、むしろ野の娘といった印象だった。平凡でおおまかな丸顔からしてそうであったが、ふくらんだ頬っぺたに点じたルノアールの赤が野の娘の

においを存分に発散していた。事実、また、女子学院に入学するまでは、研成義塾にあずけられて、安曇野の風や常念岳の雪の光に頬を灼かれてきたのであった。胸の病気が進み、このころは少量ではあるが咯血をみるようなこともあって、不安ないらだちを抑えかねている彝は、無口で内に強いものを蔵しているらしい俊子に魅力を感じるのであった。彝のその思いは、長いこと両親や弟妹から離れて遠く安曇野に残され、いまはまた、女子学院の寄宿舎に託されている、孤独な俊子の心には、容易に通ずるものがあつた。今日の土曜日は、昼食を終えるのもどかしく帰宅したのであつたが、中村屋の表口をかくれるようにして、炭屋との間の小路を入って、このアトリエへまっすぐやって来たのだつた。ベッドに寝ころがって煙草をふかしていた彝は、やあ、よく早く来られたね、と喜びの声をあげたが、俊子はろくに挨拶もしないで、乱雑に散らばっている雑誌新聞類、牛乳瓶、鶏卵の殻、くだものの皮などを片づけ、掃き出して、卓子の上を拭うた。携えてきた白菊の花を瓶に生けて、出窓に置いた。その間にベッドをおりた彝は、袴をはき、画架を据え、押入れの中にかくしてあつた画布をとり出した。土曜日ごとに帰宅する俊子をモデルに、中村屋へは知れないように、せっせと十二号を描きつづけた。俊子は二時間ほどモデルの役を終えると、再び小路をぬけ、中村屋の正面へまわって、帳場の母親に声をかけ、二階へ上るのであつた。そして、五時半までには、寄宿舎へ帰らなければならなかつた。ミッシェン・スクールだけに、外出の許されるのは土曜日の午後に限られていたのだ。はじめのうち、土曜日でも帰宅せず、あなたのお母さまは継母ですか、と仲間に不審を抱かせた俊子だったが、彝のアトリエに出入するようになってからは、いつも先頭一番に帰宅するのであつた。

「今日はこれまで。ご苦労さま。どう？ 疲れたらう」

彝は画筆を擱いて近寄ると、やにわに腰かけたままの俊子を抱きすくめて、いきなり頬へ接吻した。俊子はだまってされるままになっていた。

そのとき、扉をノックする者があった。

「ごめんなさい。ツネさん、おいでですか」

顔をのぞかせたのは、桂井当之助だった。ふりかえった彝の、とがめるようなけわしい目つきと、うしろに腰かけて、表情も変えない俊子の姿とをとらえた桂井は、少なからずあわてたらしかった。「失敬、失敬、ごめんなさい。いつだかの、あの雑木林に夕日の沈む風景画をもう一度見せてもらいたかったものだからね」

彝は口をきかなかった。ばつのわるさを感じた桂井は、はじめて描きかけの画布に気がついて、

「おや！ これは、これは。いつからはじめたのですか。もうほとんど出来あがりじゃありませんか」

「どうでもいいよ、そんなことは。とにかく、あがりたまえ」

彝は不機嫌にそう言った。

桂井はアトリエにあがって、画布のなかの俊子と、腰かけたままのモデルを代る見くらべて、

「なるほどなア」

しきりに、うなずいてみせた。見るからに病人然とした瘦身蓬髪の彝とは対照的に、肩幅広く、厳格な体格で、いろの浅黒い桂井は、同年輩とは思えないほど、若々しく頼もしげな青年だった。

「見えすいた思わせぶりはやめてくれたまえ。どうせ、様子をさぐりに来たんだろ。どうか、存分に見とどけてカーサンに報告してくれよ」

「？」

「しらばっくれなくなつていいよ」

「何か君、誤解しているようだね」

「安心したまえ、ちゃんと正解してるよ。……だいたい、君がこの時刻に中村屋へ顔を出すのが、おかしいじゃないか。静坐は明日の晩だろう」

「今日はこれからロシヤ語の勉強があるんだよ」

彝が最初から、こんなにいるさくからんでくるとは意外であつた。軽い気持で訪問なんかしてまづ、かつた桂井は悔んだ。

「ロシヤ語は、いま何をやってるんだ」

「ツルゲーネフの『けむり』がもうすぐ終るんだよ。ツルゲーネフはこれくらいで打切りにして、お次はドストエフスキーという算段さ。ツルゲーネフとお別れだと思つと、無性に君の雑木林の夕日の絵が見たくなつてね」

「そいつはおかしい。ひどくおかしい。君のそんなセンチメンタルな連想は、『けむり』のツルゲーネフじゃなくつて、二葉亭の『あひびき』だろう。ロシヤ語の勉強なんて怪しいものさ。めあてはほかにあるんだろう」

「君、いやしい推測はいいかげんにしてくれたまえ」

桂井は本気に腹を立てたらしかった。二人がこんなふうになんか神経をいらだたせている間、俊子はなにも聞えないかのように、言葉を発しないばかりか、顔いろひとつ変えなかつた。

桂井当之助は、早稲田の学生時代から評判の秀才で、母校の助教授になったときは、教師中の最年少者とかいうことだった。専攻は哲学だったが、ロシア文学が好きで、ロシア語の習得を志し、同じ志望の良といっしか仲間になった。相馬夫妻は、桂井と三人でロシアへ行くことを夢み、その約束さえ出来ていた。一旦、心にこうときめたら、すぐさま実行に移さないではいけない性分から、神田のニコライ神学校を卒業した某を教師として、良はロシア語の学習をはじめ、たちまち熱中した。桂井もやってきて、中村屋の二階で、良と一つ机に向い合うのであった。伝え聞いた天弦片上伸、孤雁吉江喬松など、早稲田の少壮教授らも仲間に加わった。片上の細君は桂井の妹でもあるため、いつからともなく片上も中村屋へ出入するようになった。吉江の生家は松本の郊外、塩尻の豪農で、父は信州に聞えた地方政客であった。それに吉江もまた、松本中学の同窓生だった。早稲田の英文科を出てからは、独歩の近事画報社の記者をしていたこともあって、はじめ片上につれてこられたのだったが、中村屋夫妻と急速に親しさを増して行ったことに不思議はなかった。

早稲田の三人の教師のうちでは、桂井は良と組んでも熱心だった。「アンナ・カレニナ」「どん底」「処女地」「父と子」「けむり」と息もつかず読み進んで、やがては、長大作の「カラマゾフの兄弟」にまでとりつくいきおいだった。ロシア語と並行して、英訳によるイブセンの脚本をも片っぱしから読破した。左団次ら自由劇場のボルクマンがকাশ出したイブセン熱によるものであった。これほどの熱中は、若い秀才の独身者、桂井にしたところで、単独では容易でなかったにちがいない。まして、良がいかに負けん気の火の玉であったところで、すでに七人の子の母であり、繁昌一途の商家の主婦として、思いもよらぬことに相違なかった。要するに、桂井と良とが協力してこそはじめて可能だったのだ。桂井は良にひかれ、良は桂井にうちこんで、たがいに異常な熱中に駆り立てて行っ

たのであった。そうになると、片上にしろ、吉江にしろ、落伍しないわけにはいかない。良と桂井とは、曾つての守衛と良との関係よりも、ある意味では、もっと熱っぽいものになって行った。守衛が死んでからは、守衛に代つて思慕をささげる若い異性の存在が、良にとっては欠かせないものになったかのようにあった。愛蔵の女関係が絶えないので、いよいよ、そうした存在が必要だったのだ。葬は守衛のいきさつを眼前に見ているので、そんなところまで突っ走るおそれはなかった。だが、その葬にしながら、柳敬助が結婚して、このアトリエから引越して行った、その後をゆずり受けてから、いつともなしに、良へのあこがれの氣持を深めつつあった。俊子が現れてからは、それが、俊子への愛情にかたちを変えたらしいけいがある。ふたりのロシヤ文学への熱中ぶりを知ると、嫉妬のいらだちを覚えないわけにはいかなかった。しかし、良としては、桂井やロシヤ文学にくらべれば、もっと強く心をひかれるものがあった。それは、三年前からはじめた静坐であり、その指導者、岡田虎二郎であった。良は毎朝欠かさず始発の電車で、日暮里まで出かけて行って、本行寺の本堂で、五時半からはじまる岡田の指導を受けて坐っていた。しかし、それだけでは満足できなかった。日曜日には、朝はいつものように本行寺で坐つて、夕刻には岡田を中村屋に招き、家族や店員をはじめ、本行寺で知り合つた道友たちの有志とかさねて特別の指導を受けるならわしになっていた。葬も桂井もその仲間であつた。葬は良と同行して、日暮里まで通ふこともしばしばであつた。そのくせ、葬の氣持は絶えず動揺をくり返していた。本行寺まで出向いて坐っているくせに、時として、岡田に一種の反撥を覚えすにはいられなかった。無性に腹が立つてならない時があつた。それでいて、岡田と静坐から自分を断ち切ることはできなかった。胸の病氣が昂じて、度々咯血をみるようになると、殊にその振幅がはげしかった。今日は、その屈折し鬱積した氣持を桂井めがけて、投げつける衝動を抑えかねたの

だ。

「せっかくの土曜日だというのに、今日はロシヤ語、明日は静坐ってわけか。いやに精が出るねえ。それはそうと、君は本気に信じているのか、岡田虎二郎や静坐をさ。ほんとうのところを聞かせてくれたまえ。カーサンに引っぱられて無我夢中でやってるだけじゃないのか。ロシヤ語も岡田虎二郎もその点で変りはないのだから。桂井君、どうなんだ」

桂井はいよいよ心外だという顔で、鼻に見入っていたが、

「では、君は岡田先生や静坐に疑問をもつというのだね。そうなのか、君は」

「ふっとそんな気になることがあるんだ」

「そうかねえ？ 僕はこのごろになって、いくらか静坐の妙味がわかってきたような気がしてね、つくづくありがたいと思ってるところなんだ。僕は静坐の門に入る前には、へんに落ち着けなくて、自分というものが分裂して、ばらばらになっているみたいな気持になることがしばしばあった。静坐の結果、全身の重心が臍下に安定しているという意識ができて以来は、自分の肉体はいつも統一されているという気持が生れてきた。同時に、靈魂というか、精神というか、これまた統一されているという気持になった。そこで、肉体と靈魂とが一体となっているという意識——そうなると、以前の不愉快な、分裂的な気持は、まるでなくなってしまった。だから、たとえば孤独などという時にも、僕の独りは、からだだけの独りでもなく、心だけの独りでもない、体と心との調和した独りだ。だから、自己という觀念がよほど変ってきた。この觀念がはっきり形に見えてきたし、その中身が充実してきたような気がする。自己というのは、厚味があって、強く、たしかで、ふくよかなものになってきた気がする。このことは、僕がまったく知らなかった新天地の経験で、心身調和の意識の結果だと思う

ね」

「そうかなア、哲学者の君がそんなにあっさり岡田式静坐に降参してしまったんじゃなさけないねえ」

「僕はそうは思わないね。降参などとはゆめにも思わない。静坐の門へ入ったおかげで、僕はほんとうの自分というものがわかったように思っている。どんなに感謝しても及ばない気がする」

「それが降参じゃないか。それをなさけないというのだ……」

そう言いかけたまま、彝は咳きこんで、あとがつづかなかった。またしても咯血があったらしく、あわててハンカチを出して、口をぬぐった。

「ツネさん、昂奮しちゃいけないよ。今日は議論はやめようじゃないか」

「逃げるのか、卑怯だよ」

「無茶を言っちゃいけない……。あ、カーサンが見えたよ。ちょうどいい、カーサンの意見を聞こうじゃないか」

相も変らぬ木綿紆で、但し仕立ておろしの、紺のおうような袷姿がすがしかった。いつもは青い顔いろも赤みがさして、いたって明るく、晴れ晴れしている。その良が顔をのぞかせた。

「やっばり、ここにいらっしたのですね」

声をかけられた桂井は、変にどぎまぎして、

「ツネさんに議論をふっかけられて、弱ってるところですよ。ツネさん今日はひどく機嫌がわるくて……」

「このひと、このごろ虫のいどころがわるいらしい。ときどき、いらいらしますが、でもすぐなおり

ます」

「何もかも心得たみたいな口をきかれるのは不愉快だ。僕は自分で自分がわからないんだ」

「桂井さん、あなたがふっかけられた議論ってなんでしょう。芸術論ですか、それとも哲学論？」

「静坐ですよ。静坐と岡田先生に疑問あり、というんですよ」

「またまた、ツネさんの悪いくせが出たんですね。毎朝、夜の明けないうちに起きて、せいぜい日暮里通いをしていながら、懷疑の雲がわきおこって、目の前が闇になってしまふんですね。高徳円満な岡田先生の前に頭をたれながら、内心に反撥を感じ、憎悪さえ覚える。それなら、なぜ断然やめないのか。あまりに不徹底でおかしいと思います。イブセンのブランドではないが、all or nothingと叫びたくなってくる。もっとも、わたしはall or nothingでは満足できない、all is nothingでなくては。わたしなら、一切即無でなければ承知できない。すこしでも鮮明を欠くところがあってはわたしはいやです」

「なに？ all is nothing だって！ カーサンが？ おどろいた。all is strong か、all is brilliant のまちがいだろう。およそ、all is nothing くらい、カーサンに無縁で、似合わしくないものはないと思うナ。桂井君と一緒に『けむり』を読んだとたんに、そうお安くかぶれるのはおかしいよ。カーサンともあろうものが変だよ」

「どうぞ、気のすむまで、たとえ軽蔑なさってください。……わたしのことはともかく、ツネさん、それなら、なぜ、あなたは一切即無の心持で静坐をやれないのですか」

「おれには芸術がある。それを捨てることはできない。芸術は僕のいのちだ」

「捨てる必要はありません。ただ、うち砕かれた魂を神にささげるだけの謙譲が必要だと思います。」

罪あるものは、罪そのまま救われるという信念があればそれで充分でしょう」

「信念？ おれにはその信念が持てないのだ。カーサンはそれによって生きて行けるんだから羨しい。そんな、きいたふうの口をききながら、一方では、刻々罪をつくってるんだからね」

彝は、そんな憎まれ口をたたきながら、再び咳きこんだ。良はうしろへまわって、背中を撫でさすってやった。咳が鎮まると、まだ、つづけるのだった。

「カーサンときたら、いつも平然自若としているのが羨しいよ。僕はかねがね訊いてみたいと思っていたんだが、静坐しているとき、あんなにはげしくからだ揺れたり、跳びはねるのは、あれは無意識かね、知っているのかね。どうも僕にはとんとわからないんだ」

「そんなことが、いまごろ、問題なのですか。岡田先生は、からだを揺すれとか、動かせとか、そんなことは一度もおっしゃらないでしょう。でも、先生に教えられたとおりに、キチンと坐って、目をふさぎ、口をむすび、呼吸を逆にして、からだ全体の重心が下腹に安定してくれば、気分がすーとして、とたんにからだが軽くなって、自然に揺れてくる。だんだん強く、はげしく揺れてくる。しまいは、ぴょんぴょん跳びはねる——わたしは決して無意識ではない、みんな知っています。揺れているナ、と思いつながら、揺られています。波に乗っているように、風に吹かれているように、ただ、それだけのことです」

いらだつ彝を良にあずけて、沈黙を守っていた桂井が、良の言葉を受けて、
「日暮里へ日参しているカーサンのようにはいかないが、僕も、からだが軽くなって、揺れ出してくるのがわかるね。ツネさんだってそうだろう」

「うん、僕だって、そんなけいを感じないが、カーサンのような派手な動きは出て来そうも

ないね。本行寺では、大勢の人が早朝から、頭を振ったり、手を動かしたり、肩を揺さぶる人もあれば、腰を煽る人もある。にじりまわる人があるかと思うと、跳びはねる人もいる。かけ声をかける人もおれば、唸る人もある。狐つきの寄り合いか、氣違いの集りのように思えて、いたたまぬ思いをすることもあるんだ。そういえば、木下さんなんか大きく揺れるほうだね。これもかねてからの疑問なんだが、木下尚江ともあろうひとが、いったい、何を考えているんだろう、と思うことがしばしばあるんだ。昔の仲間の幸徳秋水や菅野須賀子がギロチンでやられ、堺枯川や大杉栄らが売文社にこもって、荒れ狂う嵐をやり過しているときに、自分よりも若い岡田虎二郎をまるで生神さまみたいにあがめて、朝から晩まで、そのあとを追って歩きまわっているのは、どんな気がしてるんだろう。とんと了解に苦しむね」

「木下さんには、木下さんの考えがあつてのことだろう。あのひとは、演説の名手だから、演説だけを聞くと説教者みたいに思われかねないが、ほんとうのところは、迷える人、求める人だと僕はみている。指導者を求めて、さまよってきた人ではないのか。そういう木下さんの前に、はからずも現代稀有の指導者岡田先生が立ち現れたということではないだろうか。僕はそう思うナ。木下さんが岡田先生の心酔者、崇拜者になったのは、自然でもあり、当然でもあると思うんだ」

「一人前の人間の判断として、単純すぎると思うがどうだろう。まして、哲学者なんだろう、君は。岡田虎二郎をはじめから現代稀有の指導者ときめこんで疑わないところ、そこがおかしいと思うんだよ」

「ツネさんは、また、そんなこというけれど……」

たまりかねたように、良が口をはさんだ。

「……木下さんが、あんなに尊敬していた田中正造翁だって、晩年は孫ほども年下の岡田先生にまごころをささげて師事なさったではありませんか。ツネさんにしたって、先生のえらさがわからないはずはない、無理して意地を張ることはないでしょう」

「木下さんといえば、忘れられないことがある。いつだったか、こんな話をしてくれた。それを思い出したよ」

木下尚江が桂井に語った話というのはこうだった。——キリストの生涯で悲壮の最高潮はゲッセマネの半夜の祈禱だ。この夜半、そこにいたのは、キリストと弟子だけだが、キリストは弟子を離れて、独りで祈った。そうなると、この祈りは、何人の耳を通じて福音記者の手に伝えられたか。考証家は嘲って、この偉大な詩を抹殺するにちがいない。けれども、聖書を創作として愛護してきた自分には、キリストは創作中の人物だということが、なんの不思議でもない。仏教の經典にしたって、スケールの大きい創作だ。經典が伝える釈尊も明かに創作中の人物だ。釈迦やキリストばかりではない、かくいう自分がすでに創作中の人物だ。君の目に映ずる僕は即ち君の創作の僕だ。考証は歴史じゃない。歴史は創作だ。

「なるほどと思ったね。木下尚江というひとの謎がとけて、輪廓が大部分はつきりしてきたような気がした。あのひとは、岡田先生を自分の創作中の人物として見ているのだよ。岡田先生を主人公にして、思いきって雄大な叙事詩を思い描いているのではないかしら。白井俊三の『良人の自白』よりも、はるかに長大な物語を構想してるのかもしれないね」

「妄想もそこまでとりとめなくなると、引きさがるしかないね。かんじんなことは、いったい、岡田虎二郎なる人物が、そんな雄大な叙事詩や物語の主人公なんかなになれる資格があるかということだ